

日 本 仏 学 史 学 会

Société d'Histoire des Relations Nippo-Françaises

事 務 局 ニ ュ ー ス No. 163

2020年9月1日発行

【巻頭辞】

コロナ危機が続き、日本仏学史学会の活動は予定されていた月例発表が中止延期されるなど、影響を避けられずにいます。特効薬とワクチンの開発が道半ばである以上、この状況は秋以降にまで及ぶ気配です。いましばらく状況の推移を見守り、いずれ本格的な活動再開を期したいと存じます。みなさまにおかれても、ご自愛のほどをお願いいたします。

さまざまな経済、社会活動に累が及ぶ中で、フランス語検定試験（仏検）の主催母体フランス語教育振興協会（APEF）の財政悪化が懸念されています。公益財団法人として仏検受験料を大きな財源とする APEF では、春季仏検を中止せざるをえず、結果的に財政基盤に黄色信号が灯ることになったのです。協会評議員の一人として、現状をみなさまにも知っていただき、次世代フランス語学習者を励ますために仏検存続へご支援をいただきたいとお願いするところです。

APEF ではさる 6 月より企業、団体、個人の寄付を募る活動を始めています。詳しくは協会ホームページを参照いただきたいと存じます。

若い世代のフランス語学習者数が減少傾向というのは皆さまもご承知かと思えます。一例を挙げれば、東京大学で文学部仏文学科、教養学科フランス語専攻者は合わせても片手で終わるといのが現実と聞き及びました。その言語に蓄積された総合的な情報量で英語に次ぐのが仏語、独語でありましょう。英語だけに学習者が集中する弊害は、将来の日本が持たねばならない世界に対する知的な解析力を幅の狭いものにしかねない。

前大戦後、それまで日本で外国語学習の王といえたドイツ語は、敗戦とナチ・ドイツの影によって一挙に若い世代への訴求力を失いました。しかし、その後、本来はドイツ敗戦を軍事政治文化あらゆる側面から解読する必要があったにもかかわらず、あちこちの分野でドイツ語専門家が欠落してしまい、十分な研究を欠くに至ったといわれています。

フランス語学習に関しても戦後、あまりに文学研究分野が肥大化し、他分野の豊かな蓄積が看過されてこなかったか、といわれています。いまこそ、均衡のとれた形で政治・外交・経済の社会科学系、そして自然科学系に至るまでフランス語に蓄えられた多様な知恵を学びとる時代となったはずです。そこに挑む者こそが次世代に期待されるフランコフォニーの姿でありましょう。学会員のみなさまにも、APEF 存続へご支援をお願いいたします。

2020年8月

日本仏学史学会会長 池村 俊郎

【追悼】

「滑川明彦先生を偲んで」

本学会元会長・滑川明彦先生が去る2月23日逝去された。享年92歳。悲報に接した時の衝撃は数ヶ月経った今も消えることなく、悲しみの日々が続いている。

私が初めて滑川先生にお目にかかったのは今から約30年前の平成6年、月例会発表の機会を頂いた時のことである。司会を引き受けてくださったのが滑川先生だった。高名なフランス語教育の大家であり、本学会の重鎮でもいらっしゃる先生の傍で、入会間もない私は、緊張に体が震え、喉はカラカラだった。「落ち着いてやれば大丈夫」いう先生の優しいお言葉がなかったら、私はその場に倒れ込んでいたかも知れない。「日本の生糸とフランス絹織物」と題する私の初めての発表は誠に拙いものであったが、先生は、この研究は今後もぜひ続けるようにと励まして下さった。この時以来、先生には公私にわたりひと方ならないお世話になって来た。それに対しお礼の言葉を十分に申し上げられないままに先生は旅立たれてしまわれた。痛恨の思いは募るばかりである。

滑川先生は、東京外国語大学フランス語学科ご卒業後、東京教育大学仏語学仏文学専攻大学院に進まれ、博士課程を終了。その後、招聘研究員としてカナダ・ラヴェル大学で研鑽を積まれ、昭和39年から平成9年まで日本大学文理学部でフランス語教育に携われた。その間、海外派遣委員としてパリ大学での研修を経て、リヨン第Ⅲ大学外国部学部において日本語科講師を務められた。のちに、「リヨン時代の経験によって、私は日本とフランスの歴史的繋がりを強く意識するようになったのです」と先生ご自身がおっしゃっていたことがある。また、「歴史的繋がりは単に事象面だけではなく、異文化交流、異文化コミュニケーションに通じているのです」ということも教えていただいた。フランス言語学者として、フランス語教育者として高い識見と抜群の語学力をお持ちの先生は、このようにして、日仏交流史の発掘に努められようになったのである。

先生が本学会に入会されたのは、手元に記録がなく正確な年次を記すことはできないが、昭和50年代後半、富田仁会長の頃である。ご専門のフランス語研究に従事する傍ら、新たな日仏交流史の研究テーマの掘り起こしに打ち込まれ、第115回月例会における「フランスにおける日本学」（昭和62年4月）を皮切りに、月例会のみならず全国大会においてもほぼ毎年意欲的なご発表をなさってこられた。「東北におけるフランス」（昭和62年）、「五稜郭、竜岡城とフランス」（平成元年）、「会津とフランス」（平成2年）、「外国人居留地とフランス」（平成3年）、「塩野門之助とフランス」（平成4年）等、印象に残るご発表は数多い。特に五稜郭については、最近までご研究を続けられ、書籍としての出版を計画されていたが、史料の多さで実現に至らなかったことはご無念であったに違いない。しかし、先生が自費出版された、『ことばと文化 随想選』（平成18年）、『ことばと文化 日仏の出会い』（平成19年）『ことばと文化 日欧の出会い』（平成22年）という大部の3冊に、五稜郭のことを含め、ご研究領域のほぼ全ての業績を見ることができる。私はこの3部作を紐解くたび、日仏交流史研究の神髄を見る思いがするのである。

平成19年、滑川先生は会長職に就任された。先生はすでに80歳を超えておられたが、ご年齢をまったく感じさせないどころか、颯爽としたお姿は青年のようであった。いつだったか、会員有志が集まり八王子・絹の道資料館を訪れたことがあった。もちろん先生のご発案である。帰途、お住まいに近い、近藤勇が剣術の修業に励んだという「日野宿本陣」にご案内いただいた。八王子から絹の道資料館まですでに相当の距離を歩いたため、最後はみな足取り重く、やっとの思いでたどり着いたという有様だった。ところが、先生は誰よりも早足で歩かれた上に、息が上がっているというご様子は全くなく、その健脚ぶりにみんな驚かされたのだった。そのとき一言、「何のこれしき。合気道で鍛えていますからね」とおっしゃった先生の晴れやかな笑顔は昨日のことのように思い出される。

月例会では、先生は毎回必ず最前列に席を取られ、発表者の発言を一言も聞き漏らすまいとするかのように熱心にメモを取りながら、真剣な、ときには厳しい眼差しでお聴きになっておられた。しかし、発表会が終わって懇親の場に移ると、先生の表情は穏やかな笑顔へと一変して、発表者を労い（日本語またはフランス語で）、ビール（一番好きだったそうである）を美味しくそうに飲まれながら、ユーモアを交えて会員たちと会話を楽しまれた。話題は日仏交流史はもちろん、ご専門のフランス言語学から内外の社会情勢、さらに人生の機微に至るまで多岐にわたっていた。懇親会でこれらを楽しそうに話されていた先生のお姿を今も忘れることができない。私たち会員も和気あいあいとした雰囲気の中でリラックスした時間を過ごすことができ、多くのことを学ばせていただいたが、先生は、人より先に席を立つことはなく、いつも最後まで会員みんなの相手をされていた。そのため、お帰りが遅くなり、たびたび奥様にご心配をおかけしてしまったことをお詫びを申し上げなければならない。

滑川先生、本当にありがとうございました。どうか安らかにお眠り下さい。
ご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

加藤 豊子

【月例発表会】

新型コロナ・ウイルスの感染拡大を受けて、2020年10月の月例会は中止といたします。12月以降の予定につきましては、随時メーリングリスト及び学会ウェブサイトなどを通じてお知らせいたします。

【発表者の募集】

本学会では創立趣旨を実現し、また会員の研究活動を支援するため、月例研究会(3、5、10、12各月)および全国大会(6月)において、会員の登壇の機会を増やして行きたいと考えています。自薦・他薦問わず、積極的に検討させて頂きたいと存じます。

【新入会員紹介】

木村 仁志（きむら ひとし）

入会日： 2020年4月7日

所属： 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻

研究分野： フランス文学（アラン・ロブ＝グリエをはじめとするヌーヴォー・ロマン）
フランス文学における東洋（とりわけ日本）の描写。ロブ＝グリエと日本の文化人
（阿部公房、中村真一郎、蓮實重彦、市川崑）たちとの交流

【『仏蘭西学研究』第47号 掲載論文募集】

<投稿要領>

1. 内容： 日仏交流に関する研究論文・史(資)料紹介・研究ノート・その他
 2. 分量： 1論文10ページ程度。（但し、大幅に超える場合等はお相談ください。）
400字詰原稿用紙28枚程度で、体裁は前号に準じます。
本文：34字×33行
注記：35字×44行（原則として本文の最後にまとめて表記）
 3. 原稿： (1) 打ち出し原稿1部（A4）及びCD-R・USBフラッシュメモリーなどの電子媒体（E-mailで添付ファイルの送信も可）、手書き原稿の場合はお相談に応じます。
(2) タイトル及び氏名の仏訳を最後に明記してください（フランス語目次用）。
(3) 仏文の場合は日本語の要旨を添えてください（800字程度）。
(4) 役職名又は肩書きを上記(2)と併せて日本語で明記してください。
(5) 査読をさせていただきます。
 4. 締切： 2020年12月31日（9月30日までに応募する旨をEメールでご連絡ください）。
 5. 校正： 執筆者校正は再校までとしますが、執筆者が同意した場合は初校のみとします。但し、原則として単純ミスの修正等に限定します。
 6. 図版： 図・表・写真は、刷り上がり1ページ分までは無償です。但し、著作権等に係る手続きが必要な場合は執筆者に行って頂きます。
 7. 掲載費： 1論文につき10,000円（掲載誌20冊分代金を含む）。但し、10ページを超える場合等はお実費をご負担頂きます。
 8. 発行： 2021年6月（予定）
 9. 公表等： 発行の1年後に電子媒体での公表も可能とします。但し、電子媒体での公表を希望しない場合は、初校時までその旨をお申し出ください。
 10. 送付先： 〒216-0011 神奈川県川崎市宮前区犬蔵2-30-23
高村昌憲 宛
(TEL/FAX: 044-976-4573, E-mail<masanot@b01.itscom.net>)
-

【『事務局ニュース』の配信について】

『事務局ニュース』は2020年度よりメール版のみの配信となっております。引き続き郵送をご希望の場合は事務局までお知らせください。

【〈さ・え・ら〉】

会員の活動や近況、日仏・日欧文化交流史に関する情報をぜひお寄せください。メールでも郵便でも結構です。事務局宛にお送りください。随時、最新号に掲載させていただきます。

【会費納入のお願い】

学会の円滑な運営にご協力くださいますよう、お願い致します。

学生会員 3,000 円 普通会員 5,000 円 維持会員 8,000 円 賛助会員 10,000 円
振替口座 00180-9-171292 日本仏学史学会

<本 部> 〒101-0062 千代田区神田駿河台 3-7 駿河台出版社内 日本仏学史学会

<事務局> 〒192-0395 東京都八王子市大塚 359 帝京大学経済学部 野澤 丈二

TEL 042-678-3983 E-mail : nozawa@main.teikyo-u.ac.jp

(郵便物・お問い合わせ等は直接事務局までお願いいたします。)